



熊本大学研究者ロールモデル誌 vol.3

Role Model



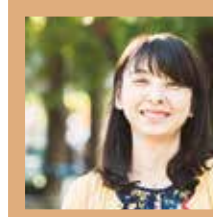
原田信志

国立大学法人 熊本大学学長

日頃より、熊本大学の男女共同参画の推進について、ご協力頂きありがとうございます。

本学は、「男女がお互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわらずその個性と能力を十分に発揮できることが出来る男女共同参画社会」の実現のために大学が担うべき役割と責任の大きさを自覚し、平成19年3月に「国立大学法人熊本大学男女共同参画推進基本計画」を策定しました。計画期間とした平成28年3月までの10年間、様々な施策を打ち出し、文部科学省の女性研究者養成のためのプログラムにも採択されて取組を進めてまいりました。平成29年には、国や社会における男女共同参画に係る課題の変化に対応するため、第2期の基本計画を策定し、全学一体となって目標達成に向けた具体的な活動を推進しています。

このたび、女性研究者活動支援事業及び次世代育成事業の一環として、本学の女性研究者や、育児と研究活動を両立させながら活躍されている男性研究者のロールモデル誌を作成し発行することとなりました。皆様と男女共同参画の推進に向けた現状について情報を共有し、本学はもとより地域において、様々な多様性を認め合うダイバーシティの実現に向けた取組が飛躍的に推進することを期待しています。



Role Model 01
米島万有子
4p



Role Model 02
大平慎一
6p



Role Model 03
金善南
8p



Role Model 04
佐藤あゆみ
10p



Role Model 05
石丸聡子
12p



Role Model 06
首藤剛
14p



Role Model 07
文東美紀
16p



Role Model 08
笹尾亜子
18p



Role Model 09
盧溪
20p



Role Model 10
畠山淳
22p



Role Model 11
三浦恭子
24p



Role Model 12
梅澤彩
26p



Role Model 13
川越明日香
28p



Role Model 14
伊勢桃子
32p



熊本大学男女共同参画
コーディネーター座談会
34p

フィールドワークの面白さに惹かれて、「蚊」を追いかけています！



Role Model 01

米島万有子

大学院人文社会科学部准教授

文学部 → 大学院（博士前期課程） → 大学院（博士後期課程） → 大学（研究員） → 大学教員

Profile よねじま・まゆこ 2003年愛知県立千種高等学校卒業。2008年立命館大学文学部（人文地理学専攻）卒業後、同大学大学院文学研究科（博士前期課程）、その後博士後期課程に進学。2014年博士（文学）取得。同年立命館大学にて専門研究員（PD）として勤務。2016年に熊本大学に着任。

水害にあったことが 地理学を学ぶきっかけに

今振り返ると、高校時代の恩師に「あなたは大学向きだ」という言葉をもらったことが、研究者になる最初のきっかけだったと思います。課題を通して、自ら問いを設定し、現地調査をしてまとめる作業の方が、詰込み型の学習よりも向いていることにより自分自身で気づいた機会でした。より具体的に、研究者になることを決めたのは、卒業論文の調査を始めた3年生の時です。指導教員や先輩たちが楽しそうに研究する姿を常日頃身近で見ていることも大きいですが、国立感染症研究所の先生からの「大阪城へ一緒に蚊を取りに行かない？」という声かけが蚊の研究へ導かれていったきっかけとなりました。

自身が水害にあった経験によって、地域の特性や歴史に興味を持ち、地理学を学びたいと決めました。そこで、地理学を幅広く学べる事と、AO入試のフィールドワーク演習方式の入試形態がある立命館大学への進学を決定。フィールドワークや研究の面白さ、研究上で出会った恩師たちの繋がりは私にとって何ものにも代え難いことに気づき、大学院進学を選択しました。研究

内容から医学系や生物系の分野に進学も考えましたが、既往研究とは異なる地理学の視点から行うことも重要と考え、指導教員や研究施設など研究環境が十二分に整っていたことから、立命館大学大学院文学研究科に進学しました。

「蚊」が、ヒトや社会に どのように関係しているのか

主に蚊が媒介する疾病に関する研究に取り組んでいます。特に、①蚊は「どこ」で生息しているのか。②人は「どこ」で蚊に刺されているのか。③人は「どのように」蚊や疾病を対処するのか、という3つの視点から研究を行っています。①については、トラップを様々な場所にかけて蚊を収集し、トラップを設置した場所の周囲にはどのような土地利用がどの程度の面積を占めているのかを調査します。そして、調査結果を統計分析し、どのような環境でどの種類の蚊がどれほど発生しやすいのかを明らかにすることによって、実際に蚊の捕集調査をしていない地域の蚊の発生数を推定します。生息分布の推定地図は、媒介蚊が多い場所すなわち病原体が侵入した場合の疾病の流行する可能性を示すリスク

マップといえます。研究成果や作成したリスクマップは、どこを重点的に対策するべきかを考える基礎資料として活用できるようにしていきたいと研究に励んでいます。

心が折れそうになることも多々、 でもそれを上回るなにかがある

研究には、興味関心の変化に対応しながら好きなことに取り組めることと、常に新しい発見ができる楽しさがあります。調査先や大学でも様々な経験を積むことができ、様々な人と接する機会が得られることは刺激的であり、成長のきっかけとなっています。

反面、常に頭から研究や仕事が離れず、毎日追われ



ブルーシートのくぼみは蚊の発生源となりやすい場所なので注意

ている感があるため、現状は仕事がほぼ100%です。着任して3年目に入ったので、今後は仕事・研究の比重や質を変化させていきたいと思うようになりました。

これまで「日本で蚊や蚊が媒介する病気の研究をしても意味がない」などの批判的な意見を受けることも少なくありませんでした。しかし、諦めずに続けていたところ、デング熱の国内流行によって転機が訪れ、研究への風当たりは変化し、縁が繋がって今の職に就いています。芯を強くもって、自分のやりたいと思うことを貫いていれば、道が開く時が訪れる。そのことを今の学生にメッセージとして伝えたいです。

宝ものは？

家族や恩師、研究仲間、友人。

これまで非常に人に恵まれることが多く、周囲の方々が助けてくださったからこそ、いまの私があります。

何事にもチャレンジし続けることが目標です！

世界でたったひとつの
ものを発見し、
発信する。
それが研究の魅力。

Role Model 02

大平慎一

大学院先端科学研究部准教授

大学教員
→ 博士研究員
→ 大学院（博士後期課程）
→ 大学院（博士前期課程）
→ 理学部

Profile おおひら・しんいち 1996年に福岡県立戸畑高等学校を卒業後、熊本大学理学部に入学。2000年に卒業後、同大学大学院自然科学研究科（博士前期課程）、その後、博士後期課程に進学。日本学術振興会特別研究員を経て同海外特別研究員としてテキサステック大学に派遣。その後、テキサス大学アーリントン校にて博士研究員。2009年に熊本大学に着任。

人・学問との出会い そして、研究の道へ

小さいときから科学が大好きで、近所の空き地でダンゴムシを集めてきたり、顕微鏡を親にねだって買ってもらい観察したりしていました。高校では、化学を暗記に頼るのではなく理論や現象をきちんと理解できるように教えていただけの先生と巡り会って、化学の面白さを知ることができ、大学は理学部化学科に進学することを決意しました。

大学では化学の講義や実験を通じて学んでいく中で、化学という学問の幅の広さ、奥の深さを感じとっていきました。大学卒業後は、高校の教員になろうと考えていましたが、現在の専門である「分析化学」と出会い、研究者への道を考えるようになりました。「分析化学」は、計算に基づく理論の理解やオリジナルな化学の場を作り出す加工、化学物質に特異的な性質を電気的にとらえるための工夫やコンピュータによるデータ収集など、私の好きな要素がたくさん。実際には学术论文を調べたり、研究内容をまとめたりと、私にとっては苦手なことも多いと研究は成り立ちませんが、研究室配属が決まった頃には、博士後期課程への進学や研究者になることを決意

していました。

オンリーワンを生み出し、世界へ発信できる これが研究の醍醐味

学生時代は、昼は学び、夜は塾や予備校の講師として働いて学費を稼ぐ生活を送っていました。入学した当初は真面目なだけの学生でしたが、大学内やバイト先などで様々な方々に出会い、語り合う楽しさ、苦楽とともにし物事を成し遂げることの大変さと得られる達成感を知ることで、人間として大きく成長したと思います。学生時代に学んだことは、今の研究生活に大いに活かされています。余談ですが、昔からパソコンのキーボードをたたく力が強いのですが、特に機嫌が悪くなるとエンターキーを押す音が鳴り響くらしく、このことを私の結婚式の2次会で研究室の先輩が披露され、妻が「今も変わらない」と言っています（笑）。

現在は、化学物質の分離や精製、検出の方法を探求する分析化学を基盤に自然界における現象の解明に取り組んでいます。特に溶存イオンについては、分析のための前処理法から検出法まで様々な手法を確立してきました。現在は、土壌に含まれるクロム種を人に必須

な三価クロムと発がん性の指摘される六価クロムに分離する手法を確立し、自然由来で生じる六価クロムの由来の解明に取り組んでいます。「オンリーワンの成果を生み出していくこと」、これを「世界に向けて発信していくこと」がこの仕事の魅力だと思います。またその過程で、研究を通じて学生の成長を感じ取れること、これが一番のやりがいです。

私生活と仕事、すべてが人生の基盤である

1人の人生、すなわちライフの中には仕事はもちろん、プライベートな部分もすべて含まれているというのが基本的な考えです。常に仕事のことも考え、常に家庭のことも考えて日々の生活を送っています。その時々で、何をすべきか、できることは何かを判断していけば、最終的に最適ところでバランスがとれてくるのではないのでしょうか。私自身もそうですが、学生のみなさんも今まで家族をはじめ、多くの人にお世話になったり、影響を受けたりして成長することで今の自分があるのだと思います。このことを常に忘れず、感謝の気持ちを大切にしてください。そして自分自身でも、常に成長し続けることを心がけてください。



私の宝ものである“ゆかいな子どもたち”

10年後の
目標は？

世界で通用するオンリーワン・ナンバーワンなものを生み出していく。今と同じようにその日の出来事をお互いに話しあえる家族でいること。

気分転換は芝刈り・草刈り・洗車（実は綺麗好き）

これから
の研究者に
大事な要素は
「コミュニケーション力」



Role Model 03

金 善南

大学院先端科学研究部助教

工学部（韓国）
→ 大学院（修士課程）
→ 大学院（博士課程）
→ 大学（研究員）
→ 大学教員

Profile きむ・そんむ 韓国出身。2003年釜慶大学応用化学工学部高分子工学専攻卒業。2008年熊本大学大学院自然科学研究科（博士後期課程）修了。熊本大学、九州大学での研究員を経て、2011年2月から現職。工学博士。現在は、アゾベンゼン基を有する高分子材料の合成と光応答特性に関する研究に取り組んでいる。私生活では2児の母。

突然巡ってきた
日本留学への転機

韓国の大学時代に配属していた研究室には、日本に留学している先輩が多く、私もいつか日本で学びたいとその機会を狙っていました。転機が訪れたのは大学4年生の秋。韓国と日本の国際シンポジウムが熊本で開催され、その際に熊本大学の先生を紹介していただきました。いざ留学が実現できるとなったものの、入学書類の準備期間は約3ヶ月と急展開でした。実はTOEICなども受けておらず、「日本で学びたい」と漠然と思っていただけで具体的な準備をしていなかったため、大変な日々となりました。しかし、目標があると多忙な毎日も充実したものとなるものです。早朝に起きて一日中勉強することも、「疲れる」というより「楽しく」感じることができました。その時はまだ独身で自分のための自由な時間があったので、留学準備に邁進することができました。

留学期間は長くて2年と想着ていましたが、日本の生活は刺激や学びが多く、あっという間に過ぎた……という感じでした。その後、博士課程に行きたいと考えるようになり、研究者への道に進むことを決めました。

失敗を成功へと転機させるには
一人で悩まずディスカッションを

私の専門は『高分子化学』というものです。高分子材料は生体適合性があり、軽量化・薄膜化に欠かせない材料であるため、医療分野から電子機器分野に至るまで、さまざまな分野で応用できる万能素材です。現在は、光応答性高分子材料を利用した新しい機能の開発を目指して研究しています。「光で光を操る」というタイトルが、とてもクール&キャッチーで気に入っています。光は遠隔操作が可能なスマートなエネルギーであり、その光を制御するのは最先端技術。時代の先端を担い、社会をよりよくするための意義ある研究だと思っています。しかし、実験はなかなかうまくいかず、分らないことばかりで落ち込むことも多いものです。想定外の結果が待っていることも多々ありますが、失敗は間違ったことではなく、「失敗も結果」と考えています。失敗の繰り返しは誰もが経験することですし、落ち込んでいた時間は無駄だと今では思うようになりました。うまくいかないときは、答えを出せないまま一人で悩まず、身近な先生や先輩、同僚の知識に頼ることも大事。実際に、毎回緊張して

しまう研究報告会も、会が終了すると達成感ですっきりとした気分になります。また、結果を説明することは自分で再度、課題や結果を見直す機会にもなります。周囲と積極的にディスカッションをすると、失敗から成功への転換が早くなるのではないかと思います。また、失敗の積み重ねにより見つかる想定外の答えがあるのも、この仕事の魅力です。

これからの研究者は
コミュニケーション力が必要

また、ワークライフバランスを保つために、とくに家庭がある研究者にとっては、自分と子どもの体調管理が第一。



研究室にて

小さな子どもは病気がちなので、急な呼び出しに備えて、なるべく仕事を後回しにしないようにしています。限られた時間内を、それぞれ充実させようと常に心掛けています。

研究職は「自分の世界に入ってコツコツ研究をする」というイメージがあるかもしれませんが、実はコミュニケーションも大事。創造性開発技法としてブレインストーミングが評価されているように、アイデアを言葉に出して意見を交換することは、間違いなく効果的です。現在は特に他分野との協力や共同研究が求められているので、積極性を身に付け、人見知りを克服すると、研究がさらに楽しめるようになります。

気分転換は？

ちょっとしたお散歩。たまには、少しざわつくカフェに行って、一人でゆっくり楽しむスイーツとコーヒー。学会への参加も刺激的でリフレッシュできます。

心配する時間があれば、今できることをやる！

「出会い」が
背中を押してくれる
ターニングポイントに

Role Model 04

佐藤あゆみ

大学院先端科学研究部助教

大学教員
→ JSPS・PD（研究員）
→ 大学院（修士・博士課程）
→ システム科学技術学部

Profile さとう・あゆみ 岩手県出身。2012年秋田県立大学システム科学技術研究科総合システム科学専攻修了。博士（工学）取得。2009年日本学術振興会特別研究員DCI（秋田県立大学総合システム科学専攻）。2012年日本学術振興会特別研究員PD（岐阜大学社会基盤工学科）を経て、2012年9月より現職。

学部1年から研究をスタート そこで運命の出会いがあった

私の出身校には学部1年生から研究を行える自主研究制度がありました。各グループに予算と指導教員ひとりをつけて自主研究をさせるという試みです。この時の研究は「骨材膨張によるコンクリートのひび割れ」でしたが、それが「コンクリートの界面とひび割れ」という現研究テーマに繋がる、運命の出会いになったのです。自主研究や卒業研究を通じて、「知ることの魅力」や「未解決のことを解き明かしていく高揚感」を知ることができました。この情熱が今でも研究への原動力となっています。

学生時代を振り返ると、角館・木匠塾（建築を学ぶ東北地方の学生が集い、コンペによる作品選定および木材で製作を行う団体）に参加したのが良い思い出です。毎夏、10日間の集団生活の中で製作活動を行い、自分たちの設計が実物となった達成感は一入のものでした。約80名との共同作業だったので、多くの衝突もあり夜通し話し合う日々でしたが、「何があっても期限内にひとつのものに結実させなければいけない」という

建築に対するスタンスはここで学びました。また、設計や理論と現実のギャップがどれだけ大きいのか、理論だけではなく実際にモノに触れ作ることの重要性を学べる最高の経験でした。

1冊の本と、海外研究者との出会い。 進むべき道が見えた瞬間

将来の職業の選択肢に、「研究者」が並ぶようになったのは学部3年生の時でした。しかし、就職や結婚など様々なことを危惧し、夢との間でずいぶん心が揺れました。その中で『親愛なるマリー・キュリー／女性科学者10人の研究する人生』という本を読み、女性研究者の先輩たちが勇猛果敢に、そして意外と楽天的に人生を歩んでいる姿に背中を押してもらいました。

また、恩師の厚意で、スイス連邦工科大学のスクリプナー教授にお会いする機会を頂いたことがあります。有名な女性研究者として、世界の最前線に居るスクリプナー教授が1秒を惜しまずに研究する姿に圧倒され、同時に国籍、性別や年齢に関係のない研究グループのトップとして多くの研究者を率いる、その凛とした態度から、女性研究者のあるべき姿を見ることができました。



これは、私にとって何よりの叱咤激励であり、進路決定の大きな契機になりました。

「好きこそものの上手なれ」 継続していけるものを見つけよう

現在は、建築構造材料のコンクリートを研究しています。コンクリートは鋼材や木材のように既製ではなく、使用材料（セメント、砂利、水など）と調合設計（材料の比率）を任意で変えることができます。つまり、コンクリートは様々な要素を検討して操作できる点が群を抜いて多いため、研究者の創造力が必要とされる材料です。熊本大学に着任してからは、建物の長寿命化を図るために耐震補強技術、新素材・高機能性材料の応用技術について、様々な実験や解析を行っています。

将来に悩んでいる学生にアドバイスをするならば、「自分が好きなことや没頭できることは何か」を突き詰めて考えることをおすすめします。「好きこそものの上手なれ」とよく言いますが、好きなことは継続できるものです。コツコツと継続することで、自分が想像している以上に、速く、そして新しい世界に行けると思います。



元気なわが子の誕生にひと安心

10年後の 目標は？

研究者であると同時に教育者として成長したい。建築材料学を通じて技術者・研究者を育成出来る先生になること。10年後は職場でも家庭（子育ても頑張りながら）でも笑顔でいられるようワークライフバランスを調整できるようになること。

整理・整頓と旅行でリフレッシュ！

「目から
ウロコが落ちる」
そんな体験をしたくて
研究を続けています。



Role Model 05

石丸 聡子

大学院先端科学研究部助教

理学部 → 大学院（修士課程） → 大学院（博士課程） → 大学（研究員） → 大学教員

Profile いしまる・さとこ 1998年に富山県の高校を卒業後、金沢大学理学部に入学。2002年に同大学を卒業後、同大学大学院自然科学研究科（博士課程）に進学し、2007年に博士（理学）の学位を取得。学位取得後は金沢大学で研究員として在籍し、2011年に熊本大学に着任。

学生時代は勉強と遊びをほどほどに両立!

地球にはたくさん火山があります。火山は地球深部（海だと7~8km以深、陸だと30~40km以深）にあるマントルの岩石（かんらん岩）が融けてできるマグマが地表に流れ出る場所です。私は、その「マグマのもと」のかんらん岩の解析から、マグマのでき方や地球ができてから現在までにどのように進化してきたのか、などを探る研究を行っています。

大学3年生までは、講義を受けながらほどほどに遊ぶ……というとても普通の生活をしていました。時には友人と夜通しでテレビゲームをしたり、早朝ボーリングをしたりということもありました（笑）。卒業研究を始めた4年生あたりからは、講義のない日は朝9時10時頃に登校、夕食を生協ですませて夜11時頃に帰宅……と、1日のほとんどの時間を大学で過ごしていました。それでも早く作業を終わらせて映画のレイトショーを観たり、空いた時間に漫画喫茶へ好きな漫画を読みに行ったりして、勉強と研究と遊びをうまく両立していたように思います。

決着がついていないものを終わりにしたくない気持ちがモチベーションに

研究者になったきっかけは……。「気が付いたら研究者になっていた」というのが実際のところ。研究が好きだったのが大きなポイントだと思いますが、その時に学んだことや研究していたことを「まだ決着がついていないのに、このまま終わりにするのはもったいない」と思い、様々な機器分析やデータ解析を続けました。また、両親や指導教員からのサポートも、これまで研究を続けられた大きな要因となっています。

研究の魅力はやはり「誰も知らないこと、気が付いていないことを明らかにできる」ことだと思います。学生時代に、ある先生が「研究をしていて目からウロコが落ちるという経験が何度かあった」とおっしゃっていました。実はそういった経験はまだ体験していないので、「目からウロコが落ちる」とか「全て腑に落ちる」という経験をしてみたい!という思いも、研究のモチベーションになっています。

家事分担・便利家電の活用で時間を「作る」

プライベートでは家庭があり、子どもがまだ小さいので、あまり長く大学に滞在することはできません。そのため、もどかしい思いをすることも多々あるのですが、「今できることをやるしかない」と割り切っています。忙しい時期は、子どもが寝た後に自宅で仕事をすることもあります。子どもが早く寝てくれないと「仕事をしたいのに」とストレスを溜めてしまう原因にもなるので、できるだけ自宅



トルコでの野外調査風景。野外で“生の石”を見るのは楽しいです

では仕事をしないようにしたいと思っています。

子どもと向き合う時間は減らせないため、夫との家事分担は当然必須。夫婦ともに協力しあいながら、また家事の時間をできるだけ減らせるように便利家電を使って時間を有効に活用しています。

研究者を目指す学生には「興味のあること、やりたいことにどんどん挑戦してください」ということをお伝えしたいです。興味があることには「継続する力」が宿っています。「目からウロコが落ちる」ような体験をともにできる日を心待ちにしています!

宝ものは?

特にないかと思いましたが、これがなくなると耐えられないという意味では、やっぱり家族かなあ、と思います。

便利家電を使いこなせば仕事と家庭の両立も大丈夫!

人生の転機は
誰にでも訪れる
常に心にアンテナを！

Role Model 06

首藤 剛

大学院生命科学研究部准教授

薬学部
→ 大学院（修士課程）
→ 留学（在学中）
→ 大学教員（博士号を取得）

Profile しゅとう・つよし 大分県出身。1995年薬剤師を目指して熊本薬学部に入學。1999年大学院博士前期（修士）課程在籍中に、人生を左右する異例の海外留学を経験。帰国後、熊本大学で助手に着任し、薬学博士号を取得。現在、薬学・創薬研究に従事しつつ、免疫学や薬学英語などの大学講義や熊大公開講座「薬を知ろう！」シリーズの実施など、幅広く活動を展開している。



人生に訪れた3つのターニングポイント

高校時代の私は、漠然と「医療」「ゲノム（遺伝子）」「難病」といったキーワードに興味を持ち、将来はこれらのいずれかに関われば良いと感じていました。そんな時、当時熊本大学薬学部の小田切優樹教授（現・崇城大学薬学部教授）と出会いました。小田切教授から「熊本薬学部はこれからの日本や世界の薬学を担う優秀な先生を集めている」と伺い、即座に熊大を目指すことに。次のターニングポイントは大学在籍中、本学の甲斐広文教授との出会いです。甲斐教授の「薬学研究者は、世界の医療を変える力がある」という言葉に影響され、大学院進学・研究者人生のきっかけを得ました。その大学院修士課程の途中で「アメリカで研究してみないか」という甲斐先生の誘いを受けました。これが第3のターニングポイントとなり、自分の将来を考えるきっかけとなりました。人生を左右する恩師との出会い、海外留学を見逃さなかった決断力、海外で培った語学力および研究力は、大きな自信となり、現在のアイデンティティの確立や思考回路の形成に大きな影響を与えたと思います。

自分のため、家族のため、世界のために

現在は、アンメットメディカルニーズ*の高い遺伝性疾患に対する治療薬（法）の開発を目指した研究を行っています。最終的にはその成果をもとに、症状が類似した患者数が多い慢性疾患の治療薬の開発への糸口を探索したいと考えています。私の研究でいうと、嚢胞性線維症（CF）という遺伝性の難治性肺疾患を研究し、世界の死亡順位が高い慢性閉塞性肺疾患（COPD）の治療薬開発へとつなげていこうとする取り組みがこれにあたります。また、最近では、このような疾患治療薬開発のために、伝承医療用途があり安全性が高い天然素材の活用を考慮した地球規模で取り組む研究「有用植物×創薬システムインテグレーション拠点推進事業（UpRod）」にも邁進しています。

私にとって、もう一つかけがえのないものは、家族や周囲の存在です。妻も大学教員ですが、「結婚、出産、育児を理由に自分のアイデンティティを失いたくない」というモチベーションで、毎日、研究・教育・家事に頑張っています。私自身も子育てや家事から学ぶことも多く「夫婦とも全てにおいて完璧である必要はなく、相互が

得意な部分で埋め合わせれば難しいことも達成できる」という発想で、家庭と仕事の両立を目指しています。

学力・体力・精神力を養い、よりよい“人財”へ

若い学生には、以下のことを期待したいです。“今”があるのは、先人たちが築いた叡智の結集によることに感謝し、次世代に、より良い環境を提供するために、現代の人々が努力しなければならないことに気付くこと。そうすれば、どのような困難に直面しても、自分自身がプレずに乗り越えて行くことができます。また日常生活では、物事を正しく考える脳を養うという目的で、基礎学力や語学を身につける意味を理解し、邁進してほしいと思います。さらに、自らのモチベーションの維持、生き甲斐を確立し、安定感のある人物になるためのセルフマネジメント力を養ってほしいと思います。人生に適度な負荷は必要。「自分はどこまでできてどこからは無理なのか」を冷静に判断し、できないことをどのように埋め合わせて行くのかという視点で物事を考えていければ、皆さんの人生は豊かになるのではないのでしょうか。ぜひ、それぞれの人生のステージに応じた自分なりの生き方で、現代社会に貢献できる“人財”になってください。



研究室の学生たちと

*アンメットメディカルニーズ：いまだ有効な治療法がない疾患に対する医療ニーズ

座右の名は？

『人生には何ひとつ
無駄なものはない』
いろいろと好きな言葉はありますが、
この言葉に私の思いの
全てが含まれています。

子どもの遊び、ジムでの運動（週1）で汗を流す！

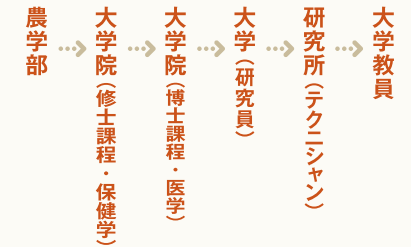
「面白そう」という
好奇心が、
自然と進路を
引き寄せていった。



Role Model 07

文東美紀

大学院生命科学部准教授



Profile ぶんどう・みき 1994年日本大学農獣医学部卒業、1996年 東京大学大学院医学系研究科修士課程修了、2000年東京大学大学院医学系研究科博士課程修了。理化学研究所テクニカルスタッフ、東京大学教員を経て、2016年から熊本大学に着任、同年からJSTさきがけ研究員（兼任）

興味のおもむくまま 好き勝手に実験していた学生時代

中学生までは、文芸部に所属して小説や劇を作ったりするような文系人間だったので、理系研究者になることなど考えたこともありませんでした。しかし、高校2年生のときに甲状腺の病気になったことをきっかけに、理系の世界に興味を持つようになりました。当時は「バイオテクノロジー」が新しい技術としてもはやされていた時代。大腸菌にヒトのインシュリンを作らせる技術などに興味を持ったため農学部に進学しました。新しい技術に引き寄せられがちなのは、今と変わらない傾向のように思います。

率直に言いますと、学生時代は勉学に熱心な大学生だったとはいえ、サークルのオーケストラ活動ばかりに熱中していました。研究室に配属されてからも、教わった実験方法以外にも良い方法があると思ったら勝手にいろいろ試してしまうような学生でした。大概はうまく行きませんが、まれにとってもいい結果が出た時はとても嬉しかったことを覚えています。そんな勝手な学生を、中には評価してくださる先生もいらっやだったので、それが励みにもなりました。

しかし、若い時に所属した研究室には周りに優秀な研究者が多かったので、自分が研究をする必要はないのではないかと考えるようになり、学位取得後は他の研究者の実験を手伝う「テクニシャン」を長く務めてきました。ただその時の仕事を評価していただき、今の研究者としてのキャリアにつながりました。進路というものを計画的に考えずにここまで来てしまったのですが、その時々面白そうだと思ったことを一生懸命やったことが、次の進路を引き寄せることにつながったのではないかと考えています。

世界初のデータに 触れたときの高揚感

現在は、統合失調症や躁うつ病などのような精神疾患の原因について、新しい観点から研究を進めています。これまで、ある一人のヒトのすべての細胞は、同じDNA配列を持っていると考えられてきました。しかし近年、ヒトの脳の細胞のDNAは、一つ一つの細胞で少しずつ違っていることが分かってきました。その脳細胞のDNAのわずかな違いが、精神神経疾患の原因になる可能性があると考え、研究を進めています。

研究者は単調作業も多く、なかなか結果が出ない時期が続くこともあります。ほんのときおり、まだ誰も見たことがない……と思われるデータを見る瞬間があります。「世界で私だけが知っているかも知れない」そんなDNAの振る舞いを見つくと、やはり感動します。

情報過多の社会のなかで 「流されない」ためには

研究者は同じメンバーと長時間顔をつき合わせる機会が多く、考え方や価値観が偏ってしまいがちなので、

プライベートでは意識的に趣味のコミュニティに参加するなど、他の世界を持つことでバランスをとっています。視野が広がるきっかけにもなるので、私生活も思い切り楽しむよう心がけています。私が学生だった頃に比べ、今は格段に情報量が多くなり、AIによる情報処理なども身近になりつつあります。便利になった反面、雑多な情報に流されやすい状況にあるのも事実。こういう時代だからこそ、今の学生には「自分の頭で考え、自分の手で実行し、それを自分の言葉で発信すること」を大切にしてほしいと願っています。



研究室にて

10年後の
目標は？

精神疾患は、残念ながらまだ原因すら分かっていない状況です。10年後には、原因の一端でも解明が進み、新しい治療法が開発されているような状況を目指しています。

楽器(クラリネット・ハーブ)を演奏することが大好き!

失敗から生まれる
「なにか」があるから
研究は面白い

Role Model 08

笹尾亜子

大学院生命科学部助教

大学教員
→ 大学院（修士課程）
→ 薬学部

Profile ささお・あこ 1990年に鹿児島県の高等学校を卒業後、熊本大学薬学部に入學。1994年に同大学卒業後、基礎研究の楽しさから修士過程に進学。その後、1996年に熊本大学医学部法医学分野に就職し、2007年学位取得。県内の法医学解剖を一手に引き受ける分野内で薬毒物分析を担当する。業務に活かせるよう、簡便な薬毒物の免疫学的検出法の開発を研究テーマとしている。私生活では2児の母。



学生時代は落ちこぼれ でも、研究は楽しくて楽しくて

学生時代の自分を振り返ると、ロールモデルとして話せるような事はほとんどありません(笑)。授業を聞いても、その内容が何に繋がるのか、どう大切なのかもわからず、試験も惨憺たるものでした。今でも鮮明に覚えていることがあります。入学したばかりの頃「予習をしたらわかるかもしれない!」と教科書を読み込んで行ったものの、教科書とかけ離れた授業内容に「こりゃダメだ」と落ち込んだことがありました。この仕事に就いた今となっては、諦めずにもっと大切に講義を聴いていれば良かったと思っています。

そんな落ちこぼれの学生でしたが、研究室に所属してからは毎日の実験が楽しくて楽しくて仕方ありませんでした。「自分が世界で初めて見るデータかもしれない!」という興奮と、自分で調べて工夫した実験がうまく行く時の喜びは、それまでに経験した事がないものでした。そんな私でも、昼も夜もないような生活をしている研究者になる事にはかなりの抵抗がありました。けれど、心から敬愛していた恩師から「君は興味のある研究については一生懸命勉強するから、研究者として進んでみなさい。」

と言われた事が後押しとなり、現職に就きました。

予想通りになったりならなかったり それが研究職の醍醐味

法医学分野の中では、実務活動として主に薬毒物の検査を担当しています。最近では法医学に関するドラマのおかげもあって、どんな講座なのか知っている方も多いように思います。熊本県では唯一の機関になるため、年間約150件ある県内の解剖事案を一手に引き受けています。担当している薬毒物検査は、亡くなられた方の死因に薬毒物の影響がなかったかを確認する大切な検査です。大学には高額な分析機器がありますので、多くの薬毒物を一斉に検査する事ができますが、解剖にまで至らない事案が大半です。そんな場面でもインフルエンザの検査キットのように簡単に薬毒物を検査できる方法を作り上げたいという気持ちから『薬毒物の免疫学的検出法の開発』という事を研究テーマにしています。

「研究の魅力は?」と聞かれたら、自分で考えて調べて工夫して「よし!」と思って実験してみた事が、予想した結果にならなかったりならなかったりする事だと思います。予想通りにならない事も多いのですが、その結果が「何かを

伝えているのではないかと考えるのも楽しい作業です。また、自分が行った研究を論文という形で残す事ができるのも素敵だと感じます。もしかしたら、後世の誰かが自分の論文を参考にして「何か」を思いついたり、次の研究に繋いでくれたりするかもしれない、というのは魅力的ではないでしょうか。

失敗することでメンタルが強くなる 恐れずに挑戦することが大事

家庭では、夫の全面的な協力をもらいながら2人の息子を育てています。子どもを育てながら見る世の中は、大人だけの視点とは全く異なるもので本当に面白い。子どもを通して近所付き合いが始まるなど、「仕事と家

庭」とは別の「第三の場所」を持つ事は、自分の精神面にとっても良い影響を与えていると感じています。ひとそれぞれにワークライフバランスの取り方があるとは思いますが、良い仕事をするためにも自分の生活を充実させる事は大切だと思います。

また、最近の学生たちと話をしていると、「無駄な事をしないように」「失敗しないように」という事に細心の注意を払い過ぎてているように感じます。「賢いな」と思う反面、若い時代につまずかなかつたばかりに、将来「失敗」への対処の時にくじけるのではないかと心配でもあります。大学時代には大いに心を養って、「しなやかで逞しい心」を持って社会に出て欲しいと願っています。

10年後の
目標は?

10年前を振り返った時に
「その頃より成長した!」
と自分で思えることを目標に
常に食欲に学習欲を持って
毎日を過ごしたいです。

座右の名「身に起こる全ての出来事は必然である」



西谷研究室の皆さんと(前列右は西谷陽子教授)

視野を広げるために 日本以外を 知ることが大事



Lu Xi

Role Model 09

盧 溪

大学院生命科学部助教

工学部(中国) → 大学院(修士課程) → 大学院(博士課程) → 大学教員

Profile ルーシー 中国出身。2006年に東北大学(中国)を卒業後、熊本大学医学教育部に研究生として入学。2008年修士課程に入学、2010年博士課程に進学し、携帯電話の過剰使用をテーマに研究をする。2014年博士号を取った後、一年ポスドクを経験し、その後特任助教として3年間熊本大学HIGOプログラムで勤務。2018年に公衆衛生学分野に着任、現在に至る。



中国で出会った一冊の本が 研究者の道を開いてくれた

中国の大学で工学を学んでいた当時、中国では携帯電話やインターネットの普及が始まったばかりで、周囲の同級生の中には徹夜でオンラインゲームをする人が続出。その結果、成績がどんどん落ち、最終的に退学した学生も何人かいました。「なぜ依存するほどゲームにハマってしまうのか」と疑問を持ちながら過ごした時期がありました。そんなある日、図書館で心理学の教科書を読んでいた「これだ！心理学を勉強すれば、疑問が解けるかも！」と思う一冊に出会いました。表紙を見ると、当時の指導教員の著書だったのです。「この先生のもとで勉強したい」と、思い切って連絡してみました。運が良く研究室に受け入れていただき、日本に渡って研究者の道に入りました。その後、博士1年の時に研究室を移動し、疫学や統計学などを勉強することになり、さらに視野が広がりました。研究者になることを後押ししてくれたのは、今の研究室の加藤貴彦教授。今なお尊敬するロールモデルです。

「日本に恩返し」をと ボランティア活動に参加

正直に言うと大学生時代は「真面目」とは言えない学生でした。今でもぎりぎりにならないとやらないタイプです(笑)。ただ負けず嫌いな性格なので、一回失敗したら、次回は同じミスをしないように気を付けています。

日本に来る前は、日本で博士号を取って帰国しようと決めていたので、迷わずに博士まで進学しました。ただ、日本の物価が高くて、経済面で親を悩ませてしまいました。幸い修士2年目の時に日本文部科学省の国費留学生として採択されて、無事に博士課程を卒業することができました。日本政府や日本の方の支援にとっても感謝しております。少しでも日本の方に恩返しをしようと、ボランティアとして月3回、日中友好協会で7年ほど中国語を教えました。この活動を通じて、日本語、日本の文化も勉強でき、とても有意義な時間を過ごすことができました。

研究テーマは『携帯電話・インターネットの過剰使用と健康状態及びメンタルヘルスとの関連』です。今まで大学生、一般社員、そして妊婦を対象にして、携帯

電話・インターネットの使用状況を評価し、健康状態およびメンタルヘルスへの影響を検討しました。今までの研究で、妊娠中の携帯電話の使用時間が長い群は、使用時間が短い群と比較し出生時体重が低いことが判明しました。携帯電話・インターネットの過剰使用によって、日常生活や社会生活に不都合が生じる事例が多数報告され、大きな社会問題となっています。これらの依存症は、現代社会特有の心理現象として世界範囲で注目されています。この問題のメカニズムを解明するため、現在研究に邁進しています。

日本は素晴らしい国 でも世界を広げると視野も広まる

日常的には「オンとオフをはっきり分ける」ことを意識しています。平日は集中して仕事を行い、休みの日は仕事のことを考えず楽しく過ごしたいと思っているので、そのために仕事の優先順位を決め一個ずつクリアしています。このようなメリハリで、ワークライフバランスを取るのが大事だと思っています。

実は学生と触れて少し懸念していることがあります。日本人の学生から「日本は最高、日本から出たくない」と

いう声が増えているからです。外国人の私から見ても、もちろん日本は素敵な国だと思うのですが、もう一歩踏み込んで、ほかの世界に行ってみるのもいいのではないかと思います。旅行でもいいし、短期留学でもいいので、いろんな世界を見ることで、視野も心も広がります。今持っているものの大切さ、ありがたさをより感じ、幸福度も上がるはず。若いうちにぜひいろいろな経験してみてください。

リフレッシュ 方法は？



オンとオフをはっきり分けて、休みの日には好きなことをして、楽しく過ごすようにしています。美味しい料理を作って写真を撮る！これで気分転換しています！

仕事と家庭を両立しながら、研究の道を進んでいきたい！！

生命の不思議
発生の神秘に魅了され
研究者に

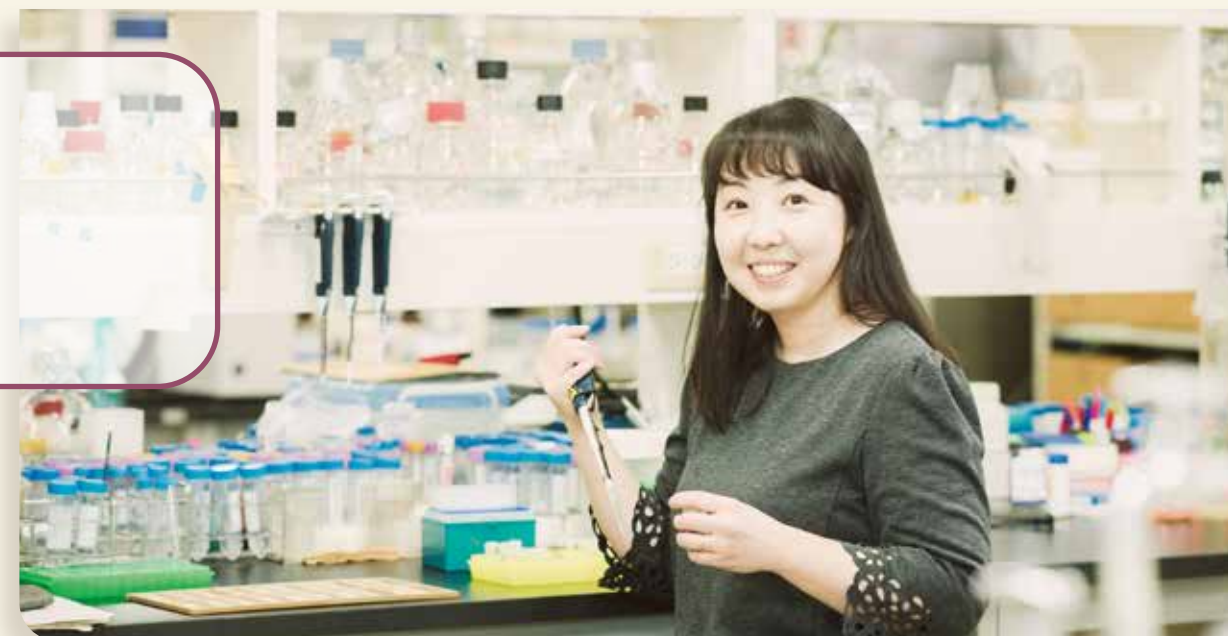
Role Model 10

畠山 淳

発生医学研究所助教

理学部 → 大学院（修士課程） → 国立研究所（技術員） → 大学院（博士課程） → 大学（研究員） → 大学教員

Profile はたけやま・じゅん 2000年熊本大学大学院自然科学研究科（修士過程）修了。その後、岡崎国立生理学研究所にて技術員として働き、研究の面白さが忘れられず2001年京都大学大学院医学研究科（博士課程）に入学。2005年に医学博士を取得後、熊本大学発生医学研究センターに研究員として着任、2009年から現職。2002年学振特別研究員DC1、2006年学振特別研究員学振PD採用。



図鑑でからだのしくみを じっくり眺めた幼少時代

幼少期の頃からお腹の中の赤ちゃんがどうやって育つのか不思議でたまりませんでした。旺文社学習図鑑『人間とからだ』で、受精から生まれるまでのページをよく眺めていたのを覚えています。その興味は今も変わらずに続いています。私の専門は、まさに発生学。好きなことをやってきたら、自然と研究者になっていました。また、曾祖父も祖父も学者、親族にも多数の学者がおり、その環境も研究者の道を選んだことに影響していると思います。

私は一貫して、「妊娠期間中に赤ちゃんの脳がどのようにして形成されるのか」を研究しています。神経幹細胞から脳が作り上げられる過程は、遺伝子によって緻密に制御されています。最近特にヒトの脳がなぜ大きいのか、脳のシワはどうやってできるのか、マウスやモルモット、サルを用いてその謎の解明を目指しています。この研究は、知能の獲得、小頭症や滑脳症のような先天性異常の解明にも繋がります。私の研究の原点であるヒトの発生の不思議を少しでも明らかにした

と思っています。

研究者の魅力は、好きな事を仕事にできる事、そして世界で最初に面白いことを発見できるチャンスがあることです。とても不思議な生命現象を少しでも理解できた瞬間は、たまらなく嬉しいです。あれこれと仮説を考へること自体がとても楽しいものです。

高校文系から 独学で理学部へ進学

高校は文系のクラスでしたが、なりたい職業を見つけられず、理系科目を独学して発生学が学べる理学部へ進学しました。大学ではとにかく、生物学を学べるのが楽しくて、講義ノートはしっかり取っていました。そのためか良い成績を取っていたと思います。空いている時間は、目一杯友達と過ごし、今でも交流が続く最高の仲間がたくさんできました。

卒業研究では、哺乳類の発生の研究がやりたくて医学部の相沢慎一先生の研究室へ。その後、京都大学の影山龍一郎先生のところで研究室の学生1期生としてお世話になりました。その時の研究が論文になった経験で、発見の喜びと論文になる嬉しさを知り、

それが研究に魅了されるきっかけになりました。その後も「やりたいことができる場所、学ぶことができる場所」、これを基準に進路を決めてきました。学部も大学の壁も乗り越えて自分で道を選んできたので、常に必死に頑張ってきたように思います。

よきタイミングで昔からの夢が叶った

若い頃からの夢だった「お母さんになること」が実現したのは40歳を過ぎてからでした。それまで睡眠時間以外は休みも含めて全部研究に当て、限られた時間のなかで旅行に行ったり友達と遊んだりしてリフレッシュしていました。現在は、週末と平日の朝と夕方は「母親業」があるので、研究に費やす時間は減っています。逆に言うと、それ以外は夜も含めて仕事をする事ができています。ストレスなく楽

しく両立できているのは、家族や研究室の皆さんのサポートがあるからこそです。周りとの信頼関係をしっかり構築できているタイミン

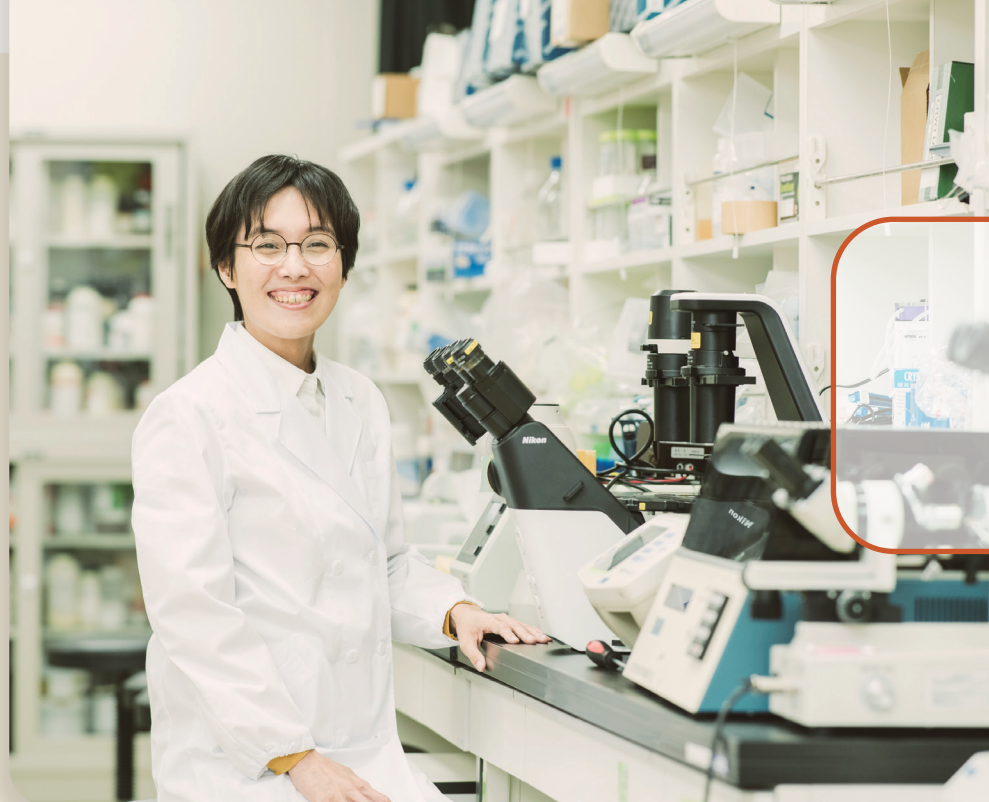


好きなことは？

料理、ブライダルブーケ作り、絵を描くこと、などの創作活動。どれも作り上げる喜びを感じます。マウス胚やサル胚を眺めることも飽きません。

一緒に謎解きしてくれる学生さんを募集中!

「面白い生き物」を
研究することで、
これから迎える
高齢化社会へ貢献したい

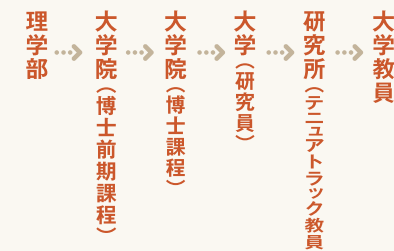


Kyoko MIURA

Role Model 11

三浦恭子

大学院先導機構
大学院生命科学部准教授



Profile みうら・きょうこ 1980年、神戸市生まれ。2010年京都大学大学院医学研究科博士課程修了。医学博士(山中伸弥・岡野栄之向教授に師事)。慶應義塾大学医学部生理学・特別研究助教、日本学術振興会特別研究員SPD、科学技術振興機構さきかけ専任研究者を経て、2014年北海道大学遺伝子病制御研究所・講師(テニエトラック)。2016年同准教授。2017年より熊本大学大学院先導機構/大学院生命科学部 老化・健康長寿学分野准教授。

専攻する分野を変え、 石にかじりついて研究を

高校時代は「そんなに好きじゃない勉強をするために、大学に行く意味があるのだろうか」と考え込んでしまって、家でゲームをしたり、授業を抜け出して遊びに行ったりするダメな生徒でした(笑)。入学当初は良かった成績はひどく下がり、出席日数もギリギリ。しかし、高校3年のとき村上忠幸先生(現・京都教育大学教授)から化学を習うようになって真の学問の楽しさを知り、大学へ進学することにしました。

大学では理学部で化学を専攻しましたが、卒業後はES細胞の研究をしようと考え、修士課程は奈良先端科学技術大学院大学で助教授だった山中伸弥先生の研究室へ進みました。

しかし、分野を変えたこともあり他の人たちのレベルについていけず、英語の論文を読むのも苦手。不運も重なって実験でも結果が出ず、就職すべきか相談したところ、山中先生に「石の上にも三年」と言われて、博士課程に進学。iPS細胞の共同研究で京都大学と慶應大学を行き来しながら、石にかじりついて研究を進め、

卒業する頃にはアカデミックの道に進む自信がつかしました。

ハダカデバネズミの魅力にはまり、 研究の道が拓けた

研究のためにハダカデバネズミ(通称デバ)を飼育しているのは、日本では私のラボだけです。デバはアフリカの地下に住む齧歯類で、寿命2~3年のマウスと同じくらいの体の大きさでありながら、寿命はマウスの約10倍の30年。老化が非常に遅く、がんになることもほとんどないという異例の長寿哺乳類です。アリやハチのような「真社会性」の階級社会をつくり、集団生活を営みます。さらに低体温で変温性、低酸素環境に適応しており、無酸素でも18分間生存できるという特徴をもつネズミです。

博士課程在学中に、DNAの塩基配列を高速・多量に解読する「次世代シーケンサー」が開発され、珍しい生き物を遺伝子レベルで研究する道が拓けました。



ハダカデバネズミ

「面白い生き物を研究したい」という気持ちからデバの研究を始めたのですが、これが予想以上の面白さで、どっぷりはまってしまいました。デバは単にユニークというだけでなく、未来のヒトの社会のために役立つ動物です。例えば、デバがもつ老化耐性やがん化耐性、無酸素耐性の分子メカニズムを解明することで、将来、革新的な老化やがんの予防法、脳梗塞や心筋梗塞の後遺症の治療法の開発につながります。また、デバの社会性を理解することで、私たちの社会を改めて見つめ直すことにもなります。ヒトの高齢化社会をよりよいものにするために、ハダカデバネズミ研究は極めて重要だと思います。専攻分野や学部は問いませんので、興味がある人は、ぜひ気軽に研究室に遊びにきてください。実験室の観察窓から、デバが生活する様子を見ることもできます。

人生は短い。 だからこそ全力で前を向き、楽しむ

現在1歳と3歳の息子を育てていますが、研究と子育ての両立はとにかく時間との戦いです。若い頃は子供にあまり関心がなかったのですが、結婚・妊娠・出産を経て、すっかり子供好きになりました。仕事として必ずな

し遂げたいのは、研究室の仲間とともに、デバの老化・がん化耐性の仕組みを解明し、夢の老化予防・がん化予防薬を開発することですが、同時に3人目の子供も欲しいと思う今日この頃です。

人生には大変なことがたくさんあります。しかし多くの場合、自分の気持ち・考え次第で、状況が大きく好転するものです。私のポリシーは、「どういう時でも、前を向いて、笑って、全力で楽しむこと」です。人生は案外短いものです。目の前のひとつひとつを、一生懸命に楽しんでいきましょう!

10年後の
目標は?



今より数段視野を広げること。
デバの老化・がん化耐性の仕組みを
解明し、夢の老化予防・がん化予防
薬を開発することです。どういう時
でも、前を向いて、笑って、全力で
楽しんでいきましょう!

いつかアフリカにすむ野生のデバに会いに行きたい!

なにかを言い訳にせず、
やりたいことを
少しずつ実現したい

Role Model 12

梅澤 彩

熊本創生推進機構准教授

大学教員
→ 大学院（博士課程）
→ 大学院（修士課程）
→ 教育学部

Profile うめざわ・あや 1996年より京都教育大学教育学部にて障害児および障害者の心理・医学・教育について学ぶ。大学卒業後、2000年4月より大阪大学大学院国際公共政策研究科にて家族形成と性的自己決定権、養子と里親、生殖補助医療に関する法的諸問題についての研究を開始。その後、榊山女学園大学現代マネジメント学部専任講師、摂南大学法学部専任講師を経て、2012年4月より大学院法曹養成研究科准教授。2018年4月より現職。

高校教員をしながら 大学院で研究をする日々

高校生の頃は、教職か法律関係の職に就きたいと思っていました。大学卒業時がちょうど就職氷河期にあたり、教員採用も厳しい状況にありましたので、高校の教員（非常勤）をしながら、大学院で法学・政策学を学ぶことを選択したのが研究者になるきっかけになりました。当初は修士課程で修了するつもりでしたが、修士論文を書いているうちに研究が面白くなり、博士課程に進学。博士課程進学後も高校の教員（非常勤）は続けていましたが、博士課程の2年頃に、自らの研究成果を学生や一般社会の方にも知って欲しいという思いが強くなり、研究者を志すようになりました。

大学院時代は、午前中は高校で働き、午後は大学院で勉強するというのが基本的なスタイルでしたが、大学時代と同様、自由気ままな暮らしをしていました。研究職を志したのが遅かったので、あまり熱心な学生とはいえなかったと思います。それでも、研究テーマに関わる当事者や専門家のところに足を運び、現場の声を聴くのは大好きでした。現場の実態を知らなければ、独り

よがりな法の解釈や法政策を提言することになりかねないとの思いがあったからです。大学院時代に築いたご縁は、今も大事なご縁としてつながっています。

現代社会における親子問題の実態と 解決へのアプローチを研究

最近では、非血縁関係にある親子（養子・里親）の問題、離婚後の親子の問題（養育費・面会交流）について研究していますが、長年の研究テーマは、生殖補助医療で生まれた子の法的地位と配偶子（精子・卵子）・胚の提供者および代理懐胎者の法的地位、出自を知る権利に関するものです。日本では、現在のところ生殖補助医療等に関する法律がなく、提供型生殖補助医療によって生まれた子の法的親子関係の成立に紛争が生じたときは、司法の判断を待たざるを得ない状況にあります。また、提供は匿名で行われるため、生殖補助医療によって生まれた子が、自らの血縁上の父・母を知りたいと思っても知ることができません。「子は授かるものから創り出すもの」になりつつある現代にあって、生殖補助医療によって生まれてくる子の法的地位、出自を知る権利はもちろん、それに関わる当事者（配偶子・

胚の提供者、代理懐胎者、依頼者）の権利も保障していく必要があります。このような法制度の在り方について、英米法の国（とくにニュージーランド）の法制度を中心に研究をしています。

研究成果を通して、社会の実態とこれに関する自らの考えを広く訴えていくことができることが、この仕事の魅力だと思います。研究内容の関係で、医療関係者への研修を行ったり、司法関係者との研究会を開催することが多いのですが、研究成果を実務上の参考にして頂けることもあり、そのような場合にやりがいを感じます。

週末婚と、公私のバランスで 「やりたいことをやる!」

関西に在住している家族とは、できるだけ多くの時間を過ごしたいと思っています。週末婚のようなかたちで毎週末移動するのは経済的・身体的にも負担ではありますが、家族を言い訳に自分のしたいことを制限したくはありません。バランスを維持し続けることは難しいかもしれませんが、なんとかなるものだと思っているし、なんとかしたい、と思っています。

女子学生だけへのメッセージではありませんが、経済的・

精神的な自立を求め続けてください。家族が病に倒れたとき、家族や大切なものを失ったとき、自分で自分を、あるいは自分の大切な誰かを養っていくだけの力と精神的な強さがあれば、恐れることは何もないと思います。家族をはじめとする他者の存在を認め、尊重していくためには、自立的な個である必要があります。

これまで執筆した論文集や教科書、実務書の一例



リフレッシュ
方法は？

博物館・美術館・温泉巡り。
オートマタや浮世絵・美人画を鑑賞するのが好きです。鶴田一郎氏（熊本出身のグラフィックデザイナー・画家）の作品を鑑賞すること、温泉巡りは長年にわたり続けているリフレッシュ方法です。

「仕事は楽しく、
遊びは真面目に」を
モットーに



Role Model 13

川越明日香

大学教育統括管理運営機構准教授

大学教員
→ 大学院(博士課程)
→ 大学院(修士課程)
→ 教育学部

Profile かわごえ・あすか 2003年に鹿児島県の高等学校を卒業後、長崎大学教育学部に入學。2007年に同大学を卒業後、教育心理学を学びたいという思いから、同大学大学院教育学研究科(修士課程)に進学。その後、広島大学大学院教育学研究科(博士課程)に進学をし、大学の教育改善をテーマに研究をする。2012年に母校であった長崎大学に就職し、5年の勤務経験を経て、2017年に熊本大学に着任。

一冊の本との出会いが
研究者の道を拓いた

研究者になったきっかけは、大学院時代に出合った『心理学者、大学教育への挑戦』(溝上慎一・藤田哲也編)という一冊の本。大学の授業で感じていた疑問や不満の解決ヒントがこの一冊に凝縮されていました。また、この本で大学教育や高等教育という分野を知り、「研究してみたい」と強く思うようになりました。それでも実際は、幼少期からの夢であった小学校教諭を捨てきれずに迷っていたのも事実です。研究者になることを後押ししてくれたのは、当時の指導教員。私が今なお尊敬するロールモデルです。

教育学部では体育を専攻していたこともあり、ジャージ姿で授業も後ろのほうの席に座るなど、どちらかというややる気のない学生でした。ただ、学年が上がるにつれ教育学が面白くなり、現在の研究テーマ「授業改善」の視点から主体的に授業を受けるようになりました。意識が変わり、本気になった瞬間かもしれません。

幼い頃から小学校教諭に強い思いがあったので、教育学部進学に迷いはありませんでしたが、修士課程

への進学は迷いました。経済的な面で両親を悩ませてしまいましたが、幸いなことに奨学金制度を利用し、学費や生活費には困りませんでした。博士課程進学については、就職への不安や親への金銭面の負担などに申し訳なさを感じましたが、最終的には「研究者になりたい」という強い思いが勝りました。今こうして目標としていた仕事につくことができ、やりがいのある日々を過ごしているので、あのときの選択は間違っていなかったと確信しています。

研究のモチベーションは
学生や先生たちの生の声

研究テーマは、大学の教育改善です。また、教育の質を保証するためにどのようなカリキュラムが必要で、その内容や方法が効果的であるかを研究しています。学生のみなさんが、「熊本大学を卒業してよかった」と言ってくれたとき、この仕事に関わられて良かったと思います。また、私の研修を受けた先生方がご自身の授業で「学生の目の色が変わった」と実感され、授業が改善されたと報告を受けたときも喜びを感じます。

多角的に物事を見るために、
遊びも一生懸命

私が意識していることは、大学時代の先生の言葉「勉強(仕事)は楽しく、遊びは真面目に」です。仕事はたくさんの人と関わりながら積極的にコミュニケーションを図り楽しくできています。一方、休日は全力で遊んでいます。疲れているときこそジョギングや運動で汗を流したり、静かなキャンプ場でのんびり過ごす心が落ち着きます。また、国内外に旅に出ると物事を多角的に見



絶景の南イタリア・アマルフィにて、何も考えず海を眺める

ることができます。楽しく仕事をし、全力で遊ぶことでバランスを取る。このメリハリが、仕事に全力で向き合い、プライベートを楽しむのには大事だと思っています。

学生時代は楽しいことがある反面、嫌なことや悩みごとたくさんありますよね。でもひと呼吸おいて冷静になると、どこかに解決の糸口が見つかることがあります。「一つのことを多角的に見る」ことでさまざまな考えを持てるようになるからです。チャンスは無数にあります。いまは見えていないかもしれないそのチャンスを見つけ出し、ぜひ自分のものにしてください。

座右の名は?

「教育を語る文化を創る」です。これは大学時代の恩師から教わった言葉です。教育を研究する者として、これから先も大切にしていきたい思いです。

疲れているときこそ、運動で汗を流す!

最初から諦めないこと。
できることを頑張れば
必ず道が開ける

Role Model 14

伊勢桃子

熊本大学附属病院
耳鼻咽喉科頭頸部外科助教

医学部 → 医局入局（医師） → 大学院（博士課程） → 医員 → 助教

Profile いせ・ももこ 1997年に熊本県立熊本高校を卒業後、佐賀医科大学医学部医学科に入学。2003年に同大学を卒業後、同年熊本大学耳鼻咽喉科頭頸部外科に入局。2006年に熊本大学医学部大学院（博士課程）に進学し、内耳の再生をテーマに研究をする。2010年に大学院卒業後、5年の大学病院勤務を経て、2015年に熊本大学附属病院耳鼻咽喉科頭頸部外科助教に着任。

研究は手探りからのスタート。 失敗を重ねて、希望をつかむ

医師になりたいと考え始めたのは小学校低学年の頃からでした。当時の文集にもそのように書いた記憶があります。「人の役に立てる職業」ということで選択したのですが、当時の私はそれ以外の職種をほとんど知らなかったため、半ば思い込みのような形で目指していました。

張り切って入学した医学部でしたが、いざ入ってしまうと、勉強はほどほどに部活動やアルバイト、友人たちとの近隣への旅行などを謳歌していました。それでも、病棟実習が始まると、それまでの机上の学習とは異なり、「現場で学べる」という興味深さや緊張感から、ぐいぐいと臨床の世界へ引き込まれていきました。

耳鼻咽喉科を選択した理由は、耳・鼻・口腔・咽喉頭・甲状腺と多彩な領域を扱うことができ、内科的および外科的双方の側面から治療を行うことができるという、専門性の高さに惹かれたからです。入局して15年以上経過した現在も、まだまだ学ぶことのほうが多い毎日を送っています。

大学院での研究内容は『内耳の再生について』で

した。あまりにも壮大なテーマで、さらに当時の医局では内耳の基礎研究の立ち上げの時期であったため、手探りでのスタートでした。指導医と研究のプロトコルを組み立てては実験し、けれど結果がでない、といったことを何度となく繰り返していましたが、何とか後半でほんのわずかな結果を得ることができました。根気強く指導してくださった先生方にも本当に感謝しています。大学院では、仮説を立て、それを実証する実験を計画し、予測した結果を得る、という物事を考える上で最も重要な「考え方の構築」を学ぶことができました。

ライフステージが変化しても フルタイム勤務ができるのは 周囲と家族のおかげ

大学院を卒業して、再び臨床の世界へ戻った後は、あっという間でした。結婚・出産と、女性として現在の仕事を続けていく上でターニングポイントとなるイベントを経験しましたが、医局の先生方そして家族の理解と協力もあり、何とかフルタイムでの勤務をこなせています。

年に数回参加する学会では、自己の発表だけでなく、講演を聴き、他大学の先生方と話をすることで様々な

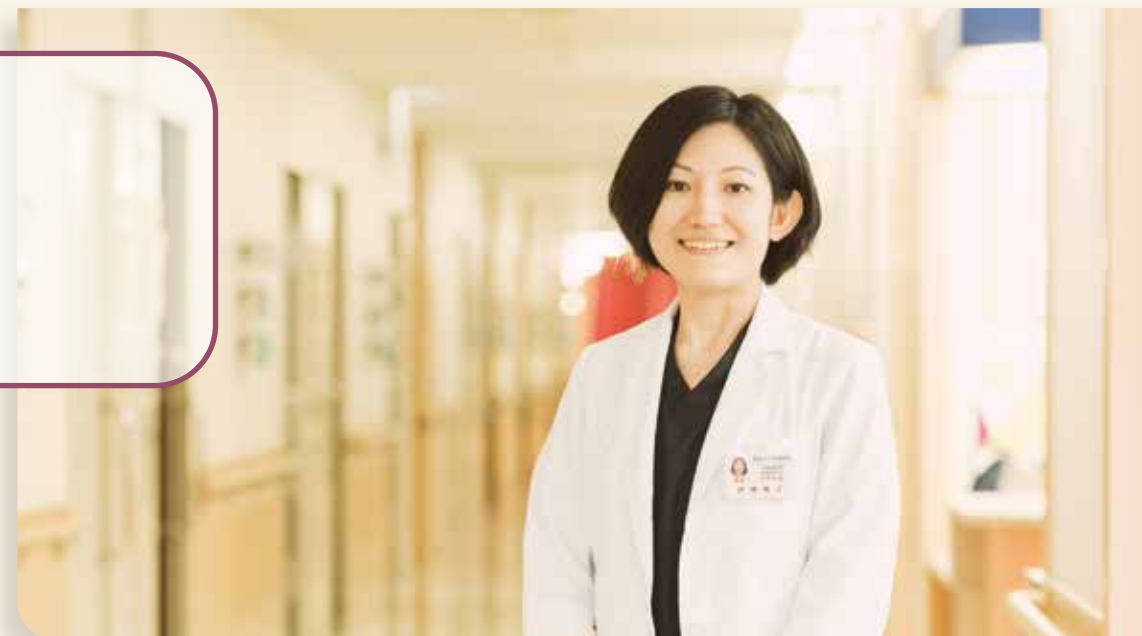
刺激を受け、日常の繁雑により下がりつつあるモチベーションをまた高い位置まで上げることができています。

育児休暇から復帰後に、耳科手術の術者としての手技を学ばせていただくチャンスを医局から頂きました。そのことが、今や私の原動力となっています。このチャンスを無駄にしないよう頑張ることが、現在の私の目標です。

できることを頑張ると、 できなかったことも可能に

一生懸命働いた後に家族と過ごす休日は、私にとって一番待ち遠しい時間となっています。育児をしながらのフルタイム勤務は、当初は困難に思いましたが、助教という立場上、実際に厳しい意見を頂くこともありますが、「できないことを考えるより、できることを頑張る!」をモットーに、周囲に助けられながら、自分の役割を果たしております。

将来の選択に悩んでいる学生に伝えたいこと。それは「最初からできないと諦めるのではなく、まずはそこに飛び込んでみて一考すること」の大事さです。「できない」と思っていたことも、行動すると意外とできることも多いはずだと思っています。



耳鼻咽喉科の先生方とは日々の情報共有が不可欠

10年後の 目標は？

臨床家としてまだまだ学ぶべくことがたくさんあるので、できる限り多くのことを吸収し、どんな環境でも自分のやるべきことを見失わない医師になっていきたいです。

国内海外問わず美術館めぐりでレベルアップ!



熊本大学男女共同参画 コーディネーター座談会

山崎広道 熊本大学理事・副学長
宮瀬美津子 学長特別補佐 大学院教育学研究科 教授
小池ウルスラ グローバル教育カレッジ 教授
皆川朋子 大学院先端科学研究部 准教授
梅澤 彩 熊本創生推進機構 准教授
川越明日香 大学教育統括管理運営機構 准教授
笹尾亜子 大学院生命科学部 助教



山崎広道



宮瀬美津子



小池ウルスラ



皆川朋子



梅澤 彩



川越明日香



笹尾亜子

これまでの熊本大学における 男女共同参画に向けた歩み

山崎：男女共同参画社会基本法(平成11年6月23日法律第78号。以下、「基本法」という)が制定されてから、社会のあらゆる分野において男女共同参画社会に向けた様々な取組がなされてきました。本学でも男女共同参画社会の実現のために大学が担うべき役割と責任の大きさを自覚し、平成18年に文部科学省の科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」に申請し、採択を受けました。その後、平成19年に「熊本大学男女共同参画基本計画」を策定し、平成28年度までの10力年を第1期の計画期間として体制の整備から様々な事業の展開まで活動を広げてきました。男女共同参画社会に向けた大きな一歩だったと思います。平成29年度からは第2期(平成33年度までの5力年)に入り、新しいコーディネーターを迎えて走り出したわけですが、ここでは、これまでの熊本大学における男女共同参画に向けた歩みとして各コーディネーターの先生方から、それぞれのご専門やお立場の切り口でお話いただきたいと思います。

まずは皆川先生、女性が少ない分野における現状はどうなっているのでしょうか？

皆川：日本の女性研究者の割合は15.3%(H28)であり、イギリス37.4%(H25)、アメリカ34.3%(H25)と比べかなり低く、特に理系分野で低い状況にあります。大学理系分野における女性教員の

割合も13%程度であり、中でも工学部は5%にすぎない状況です。工学部学生、院生に占める女性の割合もそれぞれ14%、12%であり、本学工学部においても13%に留まっています。内閣府は、次代を担う理工系女性人材の育成に向けて、科学技術や理工系分野に対する興味関心や理解を向上させるための取組を推進し、本学自然科学系においても卒業生との交流や相談会等を実施しています。男女共同参画とは、「男女が、社会の対等な構成員として……」とありますが、まだまだ女性などの少数派が声を出すことが難しい場面や頑張りすぎて過重労働になるケースも少なくないと感じます。少数派ゆえに情報発信が困難であり、情報が共有できず孤立してしまうケースも多いのではないのでしょうか。様々な取組を継続させ、必要な取組を新たに実施しながら確実にそれを実現する環境・社会を整えていく必要があると感じます。また、女性のライフイベント、家事と仕事との両立における現状と課題に関して社会的には広く知られるようになり、大学におけるサポート体制も充実しつつありますが、これらは特に経験をもつ先輩方の努力によるものが大きいと感じます。私自身も次世代を担う学生が幸せを実感できる充実した人生をおくれるよう、情報発信、課題解決やそれを成立させる社会の実現に向けサポートしていきたいと思っています。

宮瀬：熊本大学でも女性研究者を積極的に採用するよう取り組んできました。平成22年度から平成26年度に採択された女性研究者養成システム改革

加速プログラムで、本学大学院自然科学研究科において、理学・工学系の優れた女性研究者が13名採用されました。その結果、全学における女性教員比率もプログラム開始前の13.5%から15.9%まで上昇しました。

女性研究者の採用に留まらず、その後の支援も大切です。現在、女性研究者の支援体制としては、まず、研究支援が挙げられます。出産・育児などのライフイベントを乗り越え研究活動に復帰する際の学会参加旅費・論文校閲費や掲載費を支援する「女性研究者の研究再開支援」、熊本大学とコンソ加盟校で行われている有用な共同研究を推進するために研究費を支援する「共同研究支援」、妊娠・出産・育児・介護により研究が中断・遅滞しないよう研究補助者の雇用費用を大学で負担する「研究補助者雇用事業」などの研究活動に対する支援を実施しています。さらに、平成28年度からは、女性研究者及び将来性のある若手女性研究者のさらなる活躍を支援するため、「女性研究者賞表彰」及び「女性研究者奨励賞表彰」を行っています。

他にも育児や介護などの支援体制も整備・拡充しています。これは、女性研究者に限らず、すべての教職員に必要な支援として実施しています。例えば、学内保育施設(こばと保育園)の設置、病児保育の補助や休日の入試業務などにおける託児事業、介護相談事業などを行うとともに、男女共同参画推進室に寄せられる様々なご相談に対して、推進員やコーディネーターが伴走型で問題解決の支援

をしています。また、当事者同士の情報交換やコミュニケーション促進を図る目的でランチ会を開催していますが、サポート体制拡充のヒントを頂く機会にもなっています。

笹尾：育児支援制度として、産前・産後休暇や育児休業などはよく周知され利用者も増えていると思います。その他にも職務専念義務免除で妊婦健診が受けられること、授乳のための休暇(各30分以内1日2回まで)や、就学前の子どもの看護休暇が取得できることなどがあります。また、本学独自の制度として中学校就学前まで育児短時間勤務や勤務時間の繰り上げ・繰り下げを取得することができます。これらの育児支援や介護支援制度については、分かりやすく説明されたパンフレットがありますので、利用される際には是非手に取っていただけたらと思います。

また、平成21年度から大学直営となったこばと保育園は多くの職員が利用しており、安心して仕事を続けるための後ろ盾となっています。平成28年度には長年希望の声が多かった病児保育施設も設置され、今後ますます利用者が増えるのではないのでしょうか。課題としては、これらの施設が本荘キャンパスにあるため黒髪キャンパス



の職員が利用しづらいことがあると思います。直営施設の新設には多くの課題があるとしても、**企業主導型保育事業所**との契約を進めるなど様々な方法の整備が重要だと感じます。

研究者に対する育児・介護支援については、宮瀬先生がお話されたように、男女問わず利用可能な研究補助者雇用事業の他、女性研究者への復帰支援や女性研究者表彰などが行われています。私自身、出産後に復職した際は研究補助者雇用事業を大いに活用させていただきました。その時には、これら支援が資金的援助であると同時に大学からエールを頂いているように感じました。今後も是非継続していただきたい支援策だと思います。

国内外における男女共同参画やダイバーシティに向けた取組

山崎：国内外における男女共同参画やダイバーシティに向けた取組はどうなっていますか？

梅澤：先にも出ていました基本法という男女共同参画社会とは、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」をいいます(同法2条)。

基本法の成立以降、国内では、雇用の場等における男女共同参画の推進、安全・安心な暮らしの実現等の観点から、関連法の改正や制定が数多くなされてきました。たとえば、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」の改正、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」の制定、「少子化社会対策基本法」の制定、「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律」の改正、「女性の職業生活における活躍の促進に関する法

律」の制定などです。

しかし、世界経済フォーラム(WEF)が発表した2018年のジェンダー・ギャップ・指数は、日本は149カ国中110位で、G7加盟国の中での最下位は10年連続となっています。また、内閣府の調査では、3人に1人の女性がDV被害を受けていることが明らかにされており、さらにDVを目撃した子への影響(児童虐待の一種)等も問題となっています。

小池：私はスイス出身なので、つい職場における男女平等の状況を比べてしまいます。スイスでは女性の参政権が認められたのも最近(連邦レベルで1971年)のことで、ジェンダーギャップが存在するのも不思議ではないと思っています。同世界経済フォーラムが発表した各国の男女格差の報告書によると、スイスは149カ国中20位で、北欧諸国に遅れをとっています。職場環境と教育の選択肢が低く評価されたことが原因だったようです。スイスではホワイトカラーに占める女性の割合が全体の半分以下、国会議員や管理職などリーダーシップをとる役職に就く女性の割合はわずか30%台でした。

スイスも日本と同様に、昔から性別役割分担という考え方があります。つまり、男性が有償労働で家計を支える、女性が家事育児、介護看護を無償でやるということです。古い社会規範だと分かっているけど、仕組みを変えるための政治政策、予算分配や法律などが、実際の社会変化に追いついていないという現状です。

スイスの大学では、州によって異なりますが、産休・保育制度、キャンパス設備の充実(男女共に活用できる保育所・授乳室・多目的トイレ)などが進んでいます。チューリッヒ大学では子連れでカフェテリアを気楽に使える学食割引券も出ています。また、教員のジョブシェアリングの試みも進んでいます。長時間労働は男女平等の大きな妨げの一つであり、男性もそれで苦しんでいる人が多いと思います。女性が生きやすい社会は、男性も生きやす



いはずです。

また、最近ではスイスの大学で社会的公正をめぐる、『男女平等』の範囲を超える政策が目立っています。キーワードは『**ダイバーシティ**』です。社会を二つのジェンダーに分けるのは、もはや現実に即していないという理解が進んでいます。焦点が男女平等からLGBTに移り、学生を含む全てのステークホルダーの権利とアクセシビリティの平等を保障する環境づくりが始まっています。

これからの熊本大学における男女共同参画に向けて

山崎：こうした社会の変化や他大学の動きを受けて、今後の大学はどうあるべきなのでしょう。

川越：ここ数年で大学を取り巻く環境が大きく変わってきました。その中の一つが男女共同参画の取組です。女性教員の研究支援や教職員の就業環境の整備だけでなく、学生の学習環境の整備という点でも大きな変革の時期だと感じています。特に大学全入時代を迎え、学力や修学環境、家庭環境等の面で多様な学生が入学するようになったことや留学生の増加により、これまで以上に様々な問題が出てきている中、学生の支援ニーズに応じた体制の整備が進んでいます。

とりわけ、LGBTへの社会的関心の高まりもあります。私が数年前に米国の大学を訪問したとき、LGBT Resource Center や Women's Resource

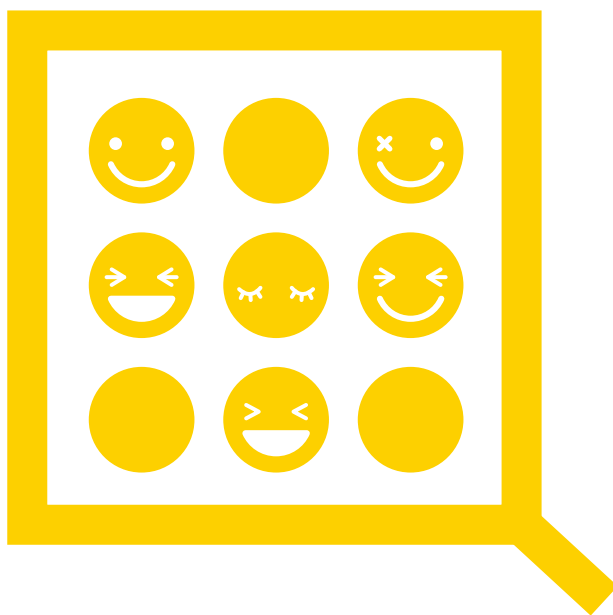
Centerが25~40年以上も前に設置をされている状況を知り、とても驚きましたが、現在、全国各地でLGBTに関する研修会や勉強会が開催されています。本学でも今年度、学内フォーラムを開催し多くの教職員にご参加いただきました。そこでは、学外講師のご講演に加えて当事者の方にもお話をいただき、今まさに大学として真剣に考える時期に来たことを感じています。

山崎：今後、熊本大学における男女共同参画に向けて、これまでのマイノリティへの支援というスタンスからの脱却と多様性を積極的に肯定する姿勢を示す必要があります。また、このことは同時に様々な課題を当事者だけの問題から組織全体の問題として考えていくことも重要です。

男性、女性という性別・性役割の問題だけでなく、すべての人が国籍、年齢、障害の有無などに関わらず個性と能力を十分に発揮できる組織、すなわちダイバーシティ(多様性)を認める社会の実現に向けて取り組むことこそが次なるステップであると考えています。

※企業主導型保育事業所について詳しくは下記の企業主導型保育事業所ポータルサイトを参照してください。

<http://www.kigyounaihoiku.jp/>



国立大学法人 熊本大学
男女共同参画推進室

〒860-8555

熊本県熊本市中央区黒髪2丁目39番1号

TEL&FAX : 096-342-3281

e-mail: gender@jimu.kumamoto-u.ac.jp

<http://gender.kumamoto-u.ac.jp>

